茨城町

「歩く会」で桜巡り

魅力発見へ大学生提案

茨城町との地域連携協定に基づき、同町魅力再発見プロジェクトを実施してきた茨城大人文学部市民共創教育センター（斉藤義則センター長）は18日、同町小堤の町総合福祉センター・ゆうゆう館で活動報告会を開いた。町の花の桜に着目し、桜や巨木を見て歩くための「さくらマップ」を作った学生が、これを生かしたイベント開催を提言。町は提言を踏まえ、4月に歩く会を実施するほか、桜を生かすまちづくりに着手する考えを示した。

町と同大は2013年1月に同協定を締結。農業再生や観光振興などを対象に、学生が中心となって調査・研究を進めている。

この日は、同プロジェクトに取り組んだ同大の都市計画論ゼミに所属する3年、板垣里沙さんと岡本真幸さん、佐藤碧さんが発表した。

町内には、樹齢500年の大戸の桜や、徳川光圀がたたえたという千貫桜の跡地に歌碑が残ることから、学生たちは歴史や物語を含む桜や巨木に着目。これらを巡る三つのコースをマップにまとめ、ウオーキングイベントを提案した。

ウオーキングコースとして、名木を巡る「さくら咲くサク」、湖畔の名所・神社を巡る「涸沼」、ポケットファームどきどきや小幡山埴輪製作遺跡、常陸牛などを育てる牧場脇を通る「もーもー」の三つを提案した。

学生3人は「昨年6月から視察会を重ね、巨木の多い地域だと感じた。牛を飼っている風景は都会にはないもの。魅力として生かしてほしい」と話した。

提案を受け、町は4月6日に歩く会を実施する予定と発表。報告会に参加した町ウオーキングの会代表の高津敏雄さんは「牛舎の風景など、地元の私たちは見落としていたコースだと思う。目の付けどころの違いを感じて、刺激になった」と感想を語った。

（武藤秀明）

茨城町の魅力再発見について発表する茨城大の学生＝同町小堤

茨城新聞HPに動画